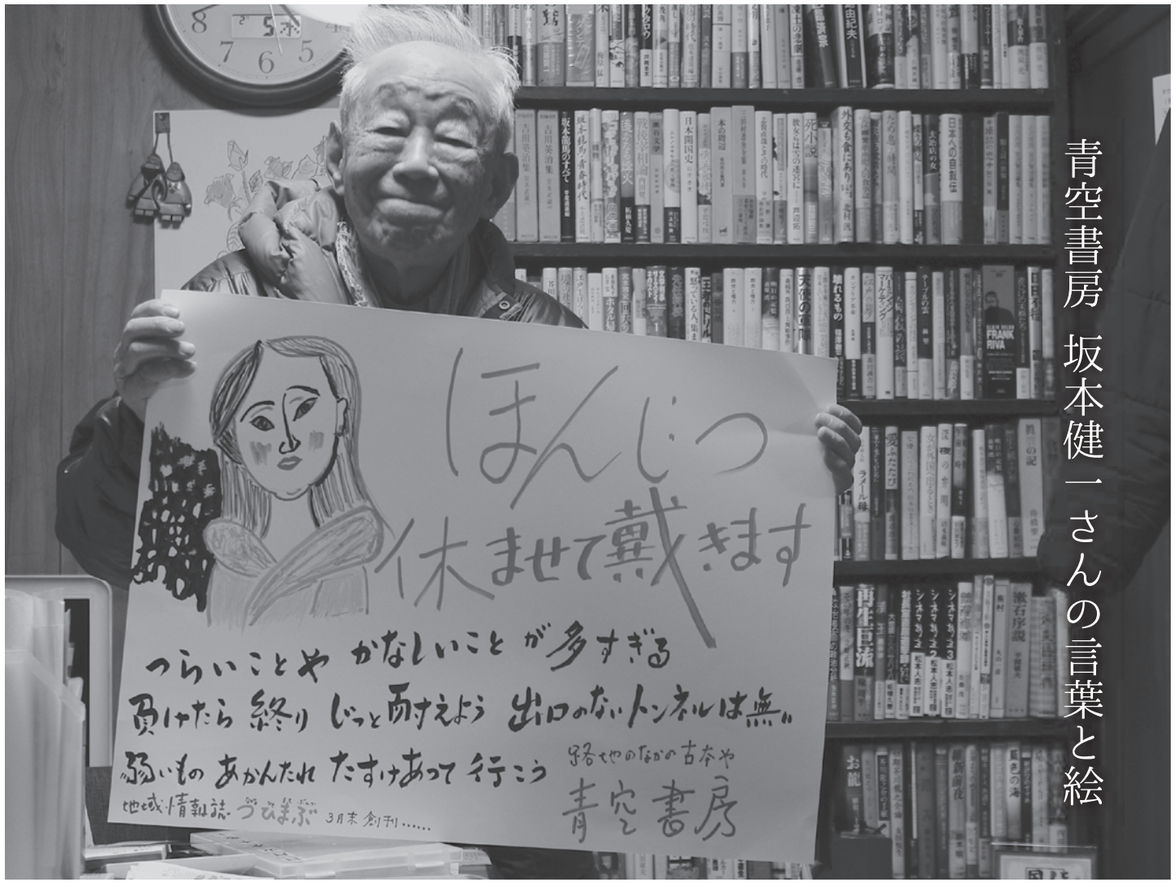
キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

つひまぶ 創刊

つながるひとまちぶんか

2014 3月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.1　2014年3月発行（毎年3･7･11月発行予定）　**編集・発行：**大阪市北区役所＋北区魅力発信サポーター（浅香保ルイス龍太・奥村武資・木村道子・清水勝民・藤堂千代子・山田寿也・山本宜弘・依藤智子）　**連絡先：**大阪市北区役所（大阪市北区扇町 2-1-27 【tel】06-6313-9549 【fax】06-6362-3821 【mail】tsuhimabu@gmail.com 【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp（誌面に載せきれない情報はブログでね♥）　**定価：**0 円　**主な配布場所：**大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンターほか多数（配布場所は blog にて随時お知らせします）



青空書房 坂本健一さんの言葉と絵

生きづらい世の中である。わずらわしい人間関係にふりまわされているとき、いろんなことがうまくいかずに鬱々としているとき、ふと、坂本さんに会いにいきたくなる。

中崎町にて古書店「青空書房」を構える坂本健一さんだ。終戦直後、天満の焼け跡に闇市があった時代から、天満に古本屋が一軒もなかった時代から営まれている、天満の、いや、大阪のたからものみたいな古本屋さん。御年90歳、大正12年生まれの、古本屋業界でも最古参の名物店主である。

坂本さんといえば、真っ先に思い浮かぶのは、定休日にシャッターに貼り出される「ほんじつ休ませて戴きます」のポスター。とても味わい深い絵と、添えられた言葉があったかい、あのポスター。

青空と木立が描かれた絵に添えられた言葉は、「空が高くなって来ました　志の旗立てる時です　本を読んでパワーアップ」

暗闇から朝日が昇るあけぼのの絵には、「幸せなことは　貧しいこと　挫折すること　そこが出発点　失敗したらしめたと　ころんだら掴んだと　思うことにしよう　成功はやり直し出来ないけど　失敗はとり戻せる」

お地蔵さんの絵には、「ええ日ばっかしやおまへん　あかん日があって　ええ日がひかる」

難しいこと、シャレた言葉が書かれているわけではない。風刺も衒いもなく、大上段に構えるでもなく、坂本さんの長い人生によって濾過され蒸留された平易な言葉が、そこには連ねられている。

平易ではあるけれども、ハッとさせられる。励まされ、心にじんわりとしみる。ほんま、しみる。そういえば、坂本さんは一滴もお酒を飲まれないらしい。でもその代わりに、浴びるほどの本

アンテナはっとけよ！

いろんな人が、おもろいことやってます。

北区のちいき活動情報

北区で子育て支援している人たち

月によっては休みの場合がありますので、お問い合わせの上、ご参加ください。
また、連絡先に繋がらない場合は、北区保健福祉センター（☎ 06-6313-9534）にお電話してください。

さくらんぼの会

●第１・４月曜
13:30 ～ 15:00
●済美福祉センター
（中崎西 1-6-8）
●不安や悩みを解消したり、気分転換をはかるなど、ゆとりを持って楽しく子育てできるようお手伝いします。
子育て中のあなた、済美福祉センターでおしゃべりしませんか？

問 北区保健福祉センター
☎06-6313-9534

めだかクラブ

●第２火曜
10:00 ～ 11:30
●滝川公園地域集会所
（天満 4-7-20）
●子育て真っ最中のあなた、みんなでおしゃべりしませんか？ゆとりを持って楽しく子育てできるよう応援します！
地域ボランティアのお手伝いもあり、とても楽しいですよ！

問 滝川地区主任児童委員 瀬島
☎06-6351-1147

パンダクラブ

●第２水曜
13:30～15:00
●豊仁地域老人憩いの家
（長柄中3-4-2）
●5月のかぶとづくりや10月のお菓子づくりなど、催しを行う月もあります。畳の広い部屋でお子さんを遊ばせながら、楽しくおしゃべりをしませんか。お待ちしております。

問 北区保健福祉センター
☎06-6313-9534

ぽっぽクラブ

●第２木曜
13:30～15:00
●中津福祉会館
（中津3-4-37）
●体操（らーめん体操など）や絵本の時間もあります。年に一度は、中津小学校で小学生との交流もします。40畳の畳のお部屋で、ゆっくり遊びましょう。

問 北区保健福祉センター
☎06-6313-9534

ひよこくらぶ

●第３火曜
10:00～11:30
●西天満地域福祉センター
（西天満3-12-19）
●「話すこと」や「集うこと」を通して子育て中の不安や悩みを解消したり、気分転換をはかったり、ゆとりを持って楽しく子育てできるようお手伝いします。

問 北区保健福祉センター
☎06-6313-9534

キッズひろば

●第１水曜
10:00～12:00
●西天満地域福祉センター
（西天満3-12-19）
●子育て中の不安や悩みの解消と、公園に遊びにいく感覚で子どもたちを遊ばせながら、母親同士のふれあいや仲間づくりのお手伝いをしています。

問 西天満地域活動協議会・西天満地域社会福祉協議会
☎06-6361-1285

とよひが・うりぼうクラブ

●第３水曜
13:30～15:00
●豊崎東福祉会館老人憩いの家
（長柄東2-1-24）
●メールでさまざまな企画や地域情報を配信し、みなさんが気軽に集まれる場を提供しています。七夕などの季節の行事や育児用品のバザーなど、地域の方や児童たちと楽しく交流しています。

問 豊崎東地区民生委員 委員長 藤岡
☎06-6351-6538

本庄ペンギンクラブ

●第４火曜
13:30～15:00
●本庄会館
（本庄東2-4-39）
●子育て真っ最中のママ！「ママ友が欲しいな」という想いに応えて、みなさまが楽しく子育てできるようにお手伝いします。
子育ての悩みも相談してください。季節の行事も楽しみに！

問 本庄地区民生委員 委員長 糟谷
☎06-6374-3405

豊崎ふうせんクラブ

●第２金曜
10:00～11:30
●豊崎会館
（豊崎4-7-1）
●親子体操、ママさんの健康体操、パネルシアターなど、月によって内容が変わりますが、地域ボランティアさんと一緒に考えながら運営しています。
楽しく交流しましょう。

問 北区保健福祉センター
☎06-6313-9534

キューピーちゃんクラブ

●第３火曜
10:00～11:30
●扇町住宅集会所
（扇町2-3-1）
●子育てのアドバイスや、お子さんが喜ぶお絵かきや工作、体操などを行なっています。
扇町住宅集会所で楽しくおしゃべりしませんか？

問 北天満地区民生・児童委員協議会 委員長 西田
☎06-6373-3806

菅北アリンコちゃん

●第１木曜
13:30～15:00
●菅北福祉会館
（池田町1-50）
●毎年10月頃、お子さんの手形と足形をとっています。季節によっては、ちょっとした催しもあります。
地域の先輩ママや子育てママ同士で楽しくおしゃべりしましょう。

問 菅北地区民生委員 三野
☎06-6357-9062

発刊にあたって

大阪市北区では、北区魅力創造プロジェクトの一環として、平成 25 年９月号の「わがまち北区」にて「北区魅力発信サポーター」を公募しました。そこに集まったサポーターたちが魅力発信事業について話し合った結果、北区では発行されていないフリーペーパーを刊行することとなりました。雑誌名は「つひまぶ」。つながる･ひと･まち･ぶんかの略です。「ひまつぶし」「ひつまぶし」ではありませんよ！雑誌のコンセプトは、北区最大の資源である「人」を通して魅力を伝えること。創刊号では、はからずも、大正生まれの 90 歳以上の方を３人取材させていただきました。お元気な方ばかりで、キタのことや人生のことなど、ためになるお話をたくさんしていただきました。また、以前に北区でフリーペーパーの編集･発行をしていた方にも寄稿していただきました。ほかにも、盛りだくさんの情報を掲載しています。副題にあるように「キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。」の雑誌です。年３回、これからも、いろいろな魅力情報を発信していきます。みなさんがご存知の、キタの隠れた魅力を教えてください。今後ともよろしくお願いします。

を読破されてきた。
「読書はおっぱいみたい　やさしくあったかく　なぐさめてくれる」
「読書は神様から人間へのプレゼント。生きてるあかしです。も一人の自分と未知の世界へ誘うもの　それが読書」
本と相思相愛の仲の坂本さんが、本の効用を説いてくれる。

坂本さんがお店を閉められる。
そんな一報が飛び込んできたのは、昨年の師走のことだ。一瞬、心に大きな虚ろができたのだけれども、ほどなくして、すぐ近くにあるご自宅にてブックカフェのようなかたちで再開すると聞かされ、ホッとした。
新しいお店はすでにオープンしていて、中崎の商店街「おいでやす通り」の天神橋筋側の入口の一本南側の路地を入ったところにある。「ホッとする　路地のなかの古書店　青空書房」の立て札が、路地の入口にある。
訪れてみると、ご自宅の一部ゆえにこれまでとは趣は違うのだけれども、67年間愛情を持って営業されてきたこれまでのお店のあの雰囲気がそのまま残っていて、居心地がよくてすっかり長居してしまった。
坂本さんは、問わず語りに話してくださった。
文学のこと、禅のこと、戦争のこと、原発のこと、映画のこと、美人のこと、天満の昔のこと…。
訪れた日は、なんと、4年前に亡くなられた奥さんの和美さんの命日で、
――僕にとっては毎日が命日なんです。奥さんはまだ生きていて、僕ね、毎日奥さんと話してます。
家に帰るとね、本当やったら誰もいないはずやのに、家があったかいんですよ。たしかに、誰かがそこにいた証しがある。奥さんが生きてるんです。そこにいてるんです。毎日、話してますよ。
そんな話をしてくださった。
――この世で一番大切なのは、親と子のタテの関係やなくて、夫婦のヨコの関係なんです。僕はそう思うな。
これをおろそかにすることは、自分をおろそかにするのとおんなじです。
そんなことも話してくださった。
どこまでも奥さんにベタ惚れだった坂本さんは、本を愛するように和美さんを愛し、和美さんを愛するように本を愛した。
「大阪大好き　文学は生命　嫁はんは世界一だ」
お店を出ると、朝から吹雪いていた空がキレイに晴れわたっていた。
――ええ天気になりましたなあ、今晩はいい月が見れるで。
坂本さんはニッコリと笑って、そうおっしゃった。
宇宙から見たら、人間の一生なんて束の間やで。
笑みが溶けだしたようなそのお顔は、そう問いかけているようでもあった。
行雲流水。
雲が行くように、水が流れるように、気ぃはらんと自然体で。
これもまた、坂本さんからいただいた言葉。
坂本さんの言葉は、優しい。強くて、まっすぐで、優しい。
やっぱり元気が出る。

（浅香保ルイス龍太）

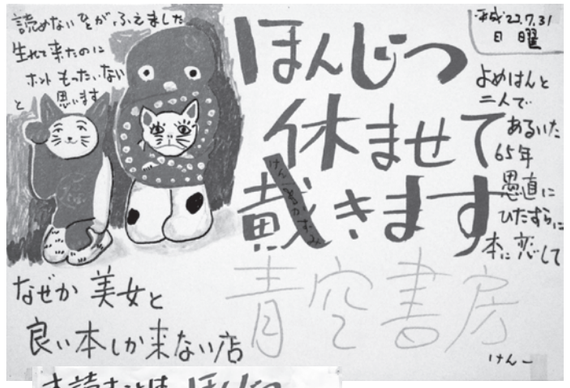
ほんじつ休ませて戴きます

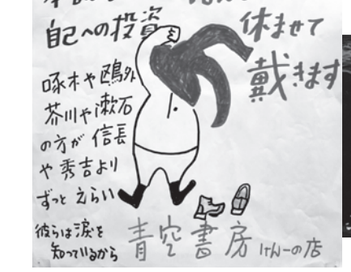
つひまぶ創刊号では、中崎の名物古書店・青空書房の坂本健一さんの言葉と絵を特集します。定休日に貼り出される「ほんじつ休ませて戴きます」のポスター。多くの人の心に響いてきたあのポスターを、さまざまな角度から紹介します。膨大な数ゆえに漏れてしまうものも多いですが、ぜひ、あなたのお気に入りの一枚を見つけてください。

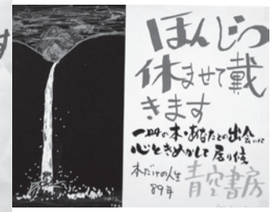
青空書房
大阪市北区浪花町4-24
tel■06-6371-7992
営業■11:00～18:00
定休日■木・日曜

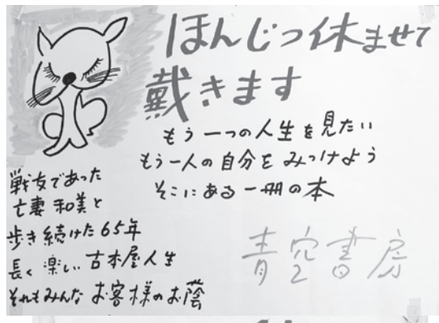
【素晴らしきかな読書編】

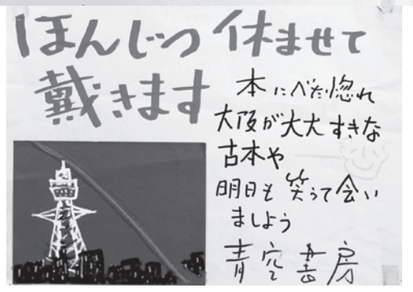
古本屋さんなのだからあたりまえなのかもしれないけれども、坂本さんのポスターには、読書の素晴らしさについて描かれたものがたくさんあります。でも教ではなく、もちろん本屋さんの商売としての営業ツールでもなく、それは、本を読め！教養を身につけろ！ってオヤジのエラソーな説無類の本好きのグランパが、本はええで～、と、好きで好きでたまらないものを紹介してくれる、そんな親近感があるものばかりです。
「もう一つの人生を見たい　もう一人の自分をみつけよう　そこにある一冊の本」
読書する歓びのひとつは知の探求だと思いますが、坂本さんの手にかかれば、愛らしい猫の絵とともに、こんなにも易しい言葉で描かれ、胸の奥深いところへスッと入ってきます。
これもいいです。
「なぜか美女と良い本しか来ない店」
招き猫の絵ととも描かれた言葉は、そんなのです。内面が磨かれた人こそ美男美女だとおっしゃっているわけですが、それを、こんなふうにサラッと描いてしまうユーモアったら。
「本にべた惚れ　大阪が大大すきな古本や　明日も笑うて会いましょう」
これ、すごいと思いませんか？　本好きのアピールじゃない。明日も笑って会いましょう、です。なんのための読書なのか。本への偏愛を超えて、ひとりの読書人が獲得した本を読む人生がシンプルに描かれています。巷の本屋さんに溢れるどんなコピーよりも、この言葉が刺さります。
「本だけの人生89年」。そんなふうにたった一行でご自分の人生を言い表せてしまえるかっこよさ。どれほど好きなものにのめり込めば、こんなふうに言えるのか。思わず口をつぐんでしまう一言半句に出会うこともあります。





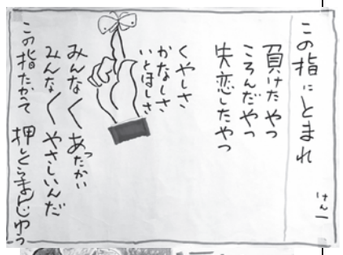


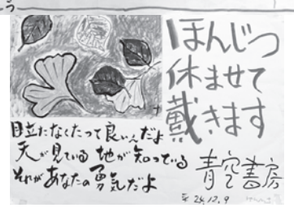




【人生の応援歌編】

坂本さんのポスターに描かれた味わい深い絵、そして漢方薬のようにじんわりと効きそうな言葉たちのなかには、人生の応援歌とでも言いたくなるような、見る人を勇気づけてくれるものがたくさんあります。それらはまことに平易な言葉ばかりで、普段なら見過ごしてしまっているような言葉ばかりです。他で出会ったなら、クサイなーと、鼻白んでしまうかもしれません。でも、坂本さんのは違う。思わず立ち止まり、じっと見て、自身を振り返ってしまいます。そしていつの間にか、そうやんなーと、元気をもらったりしている。なぜですかね？
坂本さんの絵は、飄々としているのに、どこか人なつっこい。描き文字もそう。なんとも言えない愛嬌があって、そこに坂本さんの人柄が透けて見えるような気がします。余白がいっぱいあるせいか、言葉や絵に描かれていない坂本さんの見えない思いが、たっぷりと伝わってくるような、そんな気にすらなります。
「この指にとまれ　負けたやつ　ころんだやつ　失恋したやつ　くやしさ　かなしさ　いとほしさ　みんなくあったかい　みんなくやさしいんだ　この指たかって　押しくらまんじゅう」
ほら。描かれない、見えない坂本さんの無限大の思いが込められていると思いませんか？

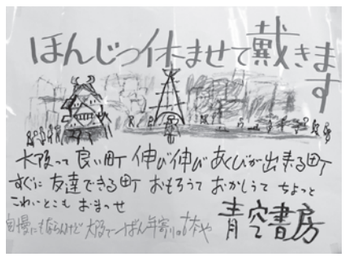


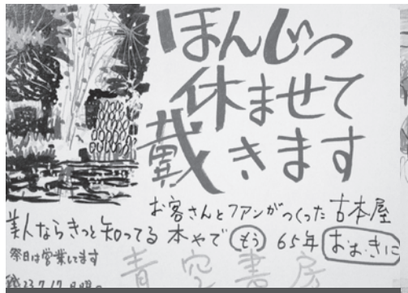


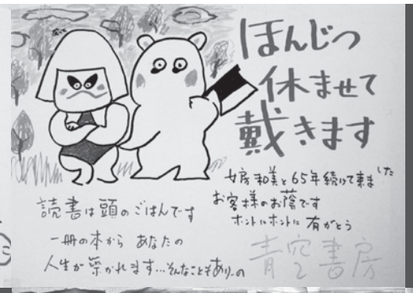
【大阪ええとこ編】

四季折々の風景、奥さんの和美さん…。もうひとつ、大阪への溢れんばかりの愛があります。
「大阪って良い町　伸び伸びあくびが出来る町　すぐに友達できる町　おもろうて　おかしうて　ちょっとこわいとこ　うておかしうて　ちょっとこわいとこ　もおまっせ」
思わず、クスッと笑ってしまいます。
ちょっとこわいとこ、あるある！
坂本さんの画力が光る一枚は、これ。
「思索と瞑想　本が恋人の季（とき）」
天神祭の様子が描かれています。花火、まちの灯、水面に映る祭の灯。キタが水の都であるだけでなく、水の都のよさが一枚の絵のなかに凝縮されていて、これがキタやねん！と、このポスターを持って誰かに訴えたくなります。それを細目で眺めながら思索にふける坂本さんの姿もまた想像できて、どこまでも本好きなんやなー、というのも。
御堂筋の銀杏、通天閣、太陽の塔。大阪の風物詩やランドマークも多数描かれ、坂本さんのポスターって、そのまんま大阪のガイドブックになります。
もちろん、読書人らしく、西鶴、近松、オダサク、聖子さんも。
大阪、ええとこです。坂本さんのポスターを見ていて、あらためて思います。

坂本さんの好きなもん。描かれてきたもん。
本、文学、お地蔵さん、

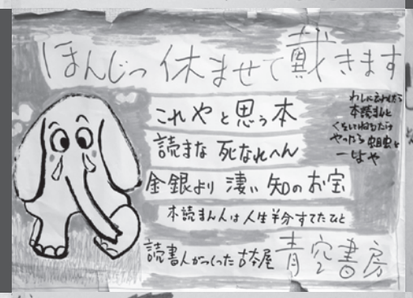


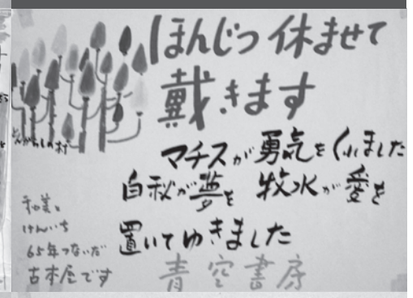


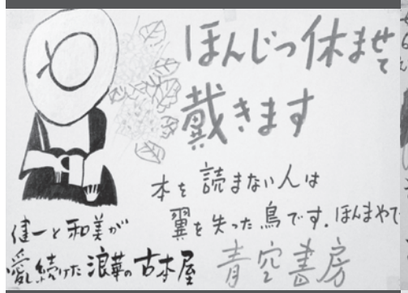


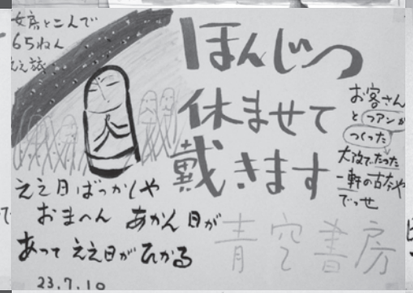
星は何でも知っている
ゆうべ あの娘が泣いたのは
きっとリルケの詩集です
いいえ啄木ですよキット

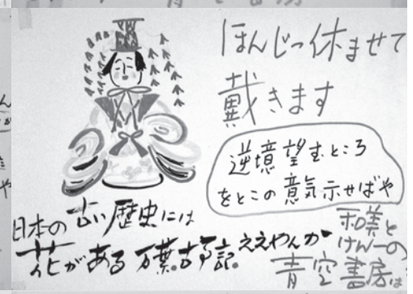
お客さんとファンがつくった古本屋
美人ならきっと知ってる本やで
もう 65年 おおきに



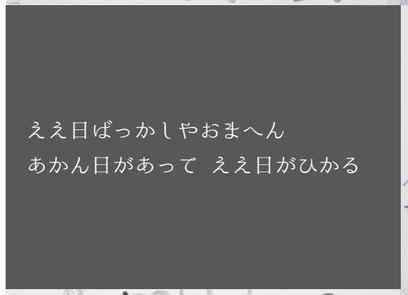


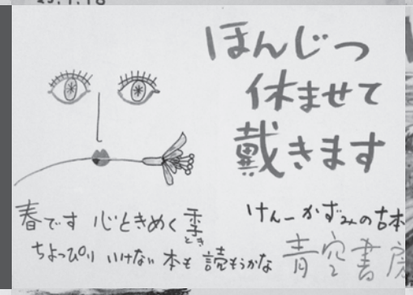


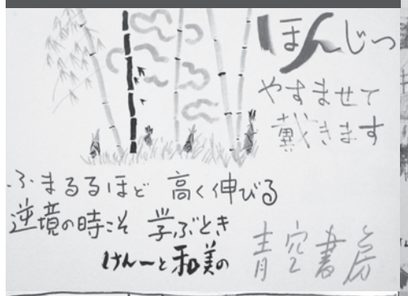


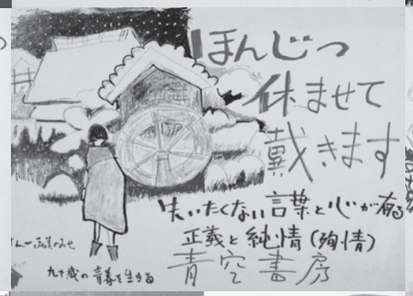


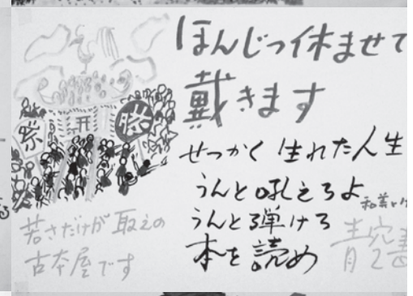
ええ日ばっかしやおまへん
あかん日があって ええ日がひかる

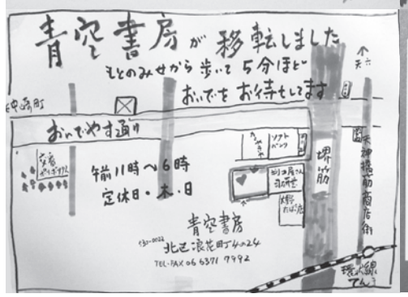


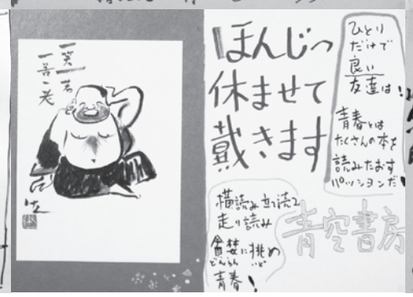


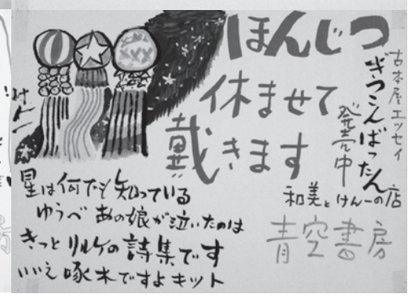


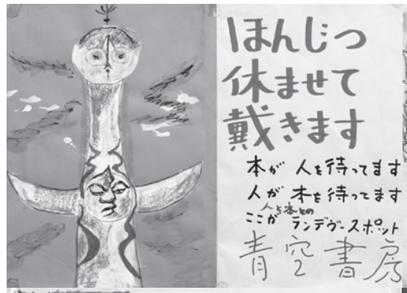


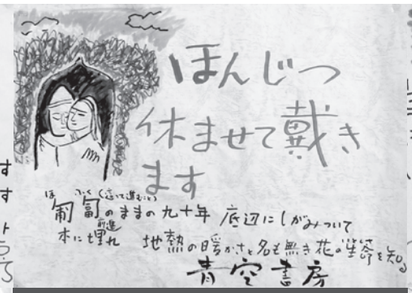


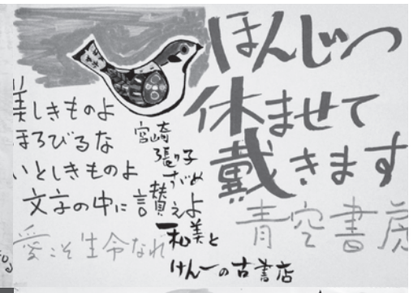


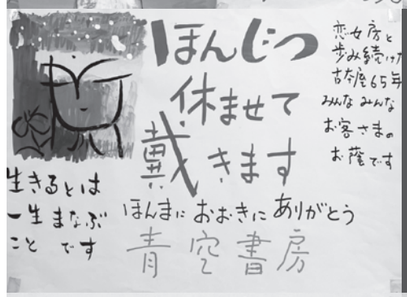






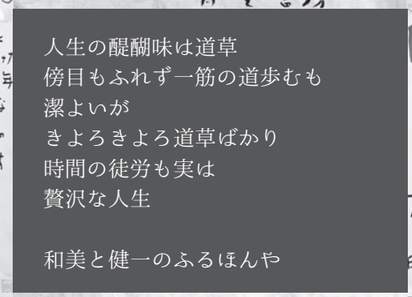


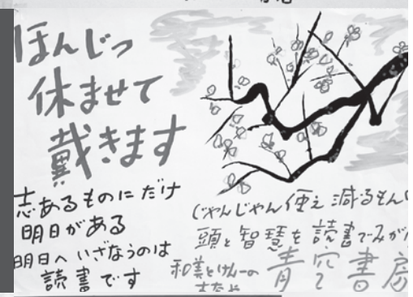


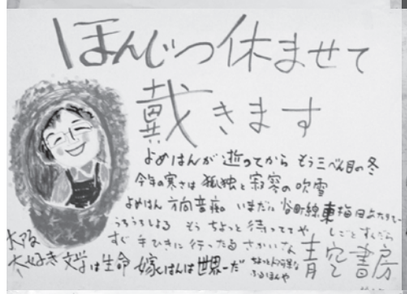


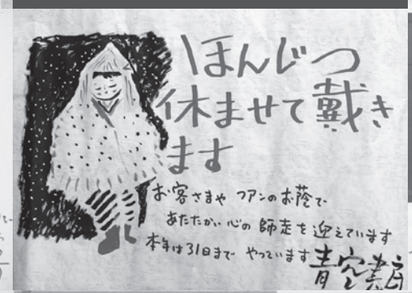
人生の醍醐味は道草
傍目もふれず一筋の道歩むも
潔よいが
きよろきよろ道草ばかり
時間の徒労も実は
贅沢な人生

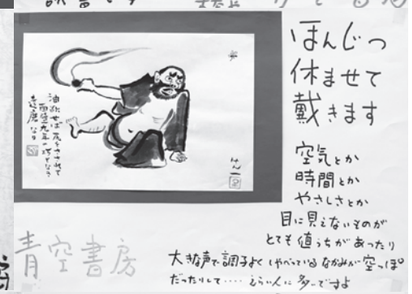
和美と健一のふるほんや

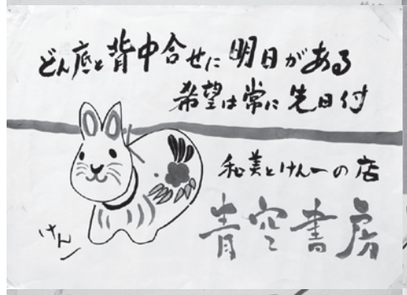


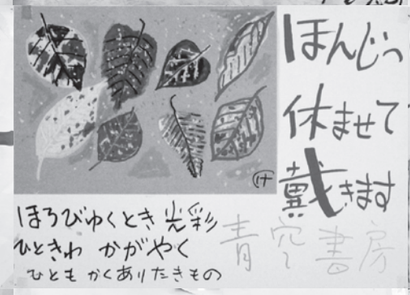


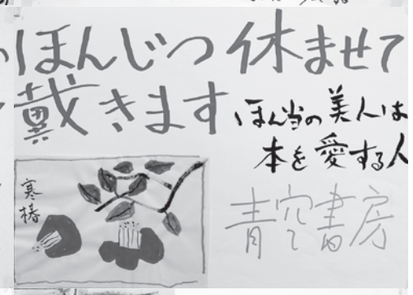


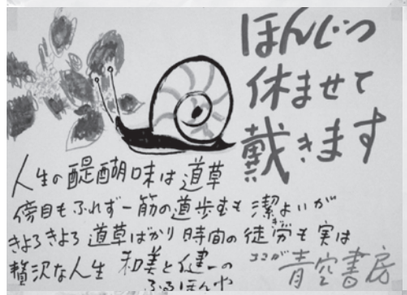


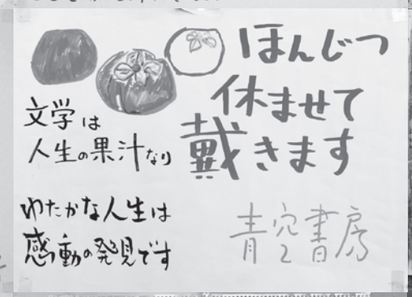


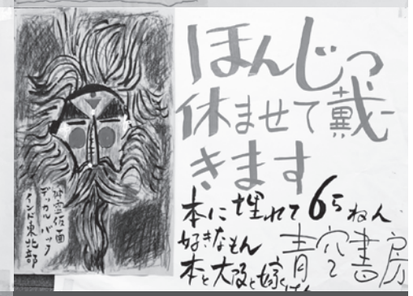


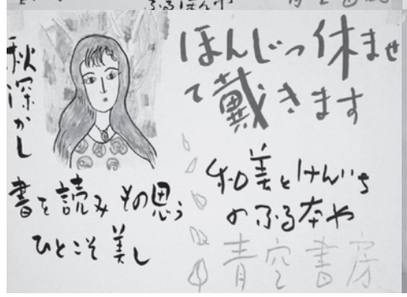


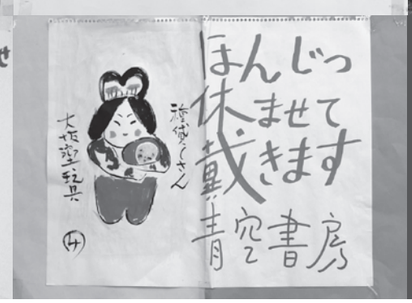












本が　人を待ってます
人が　本を待ってます
ここが人と本とのランデヴースポット

現代に残る、かつての名残

まちの記憶

昭和30年代キタ点描
慶住院〜歯神社〜阪急百貨店大食堂〜大阪駅の専門大店〜旭屋書店本店

祭屋 梅の助
井上 彰

木造２階建ての「旭屋書店本店」。

昭和 15 年（1940 年）に改築され、２階まで完成した「３代目大阪駅駅舎」。

明治 34 年（1901 年）に完成したゴシック風石造りの「２代目大阪駅駅舎」。昭和 10 年（1935 年）に解体されるまで使用された。

現在の「歯神社」。通称、「はがみさん」。

昭和 30 年頃（1955 年頃）の「阪急百貨店」。

「浪花百景」に描かれた「南浜の鬼子母神」。

南浜の鬼子母神と、歯神さん そして阪急百貨店の大食堂

私は昭和24年、淀川区（当時は東淀川区）の三津屋に生まれ育った。幼少の頃に、月に一度か二度は祖母に連れられ、南浜にあった『きしぼじんさん』に参ったことが、今でもなつかしい。

通称『きしぼじんさん』とは、子授け・安産・子育ての守護である鬼子母神を祀った日蓮宗慶住院のことで、茶屋町の東、旧玉姫殿の東方、現在のコープ野村のあたりにあった。歌川国貞の浪花百景にも描かれたが、古くは江戸時代の観光案内である摂津名所図絵にも、「霊験あらたかなりとて、遠近より歩みを運ぶこと大かたならず。さる程に宝前の供物、献灯、香花の甚しきは言うも更なり……」と謳われた古寺である。

慶住院のあたりは、かつては菜の花見物の名所で、鶴の茶屋、萩の茶屋、車の茶屋などの料亭・茶店もあって、近郷近在の人びとの行楽地として、たいそう賑わった。

しかし時代の移ろいとともに、のどかな田園の風情は消え去り、やがては鶴野町や茶屋町などの町名にわずかに名残をとどめるばかりとなった。

五十年以上も前のことで記憶もおぼろげではあるが、慶住院境内の石畳はいつもきれいに掃き清められて打ち水がしてあった。多くの参詣者があるものの、お香の煙がただようほの暗い本堂はいつも寂然としていた。子ども心に印象に残るのは、参道脇の二宮金次郎の石像である。（注／慶住院は、昭和51年に都会の喧騒を避けて高槻市摂津峡に移転された。）

祖母に寄り添いながら『きしぼじんさん』でひと時を過ごしたあとは、東海道線の高架に沿って梅田の方へと歩く。途中かならず立ち寄ったのが『はがみさん』の小さな祠であった。

歯神社は文字通り歯の神さんとして古くから庶民に親しまれていた。一説によれば、むかし淀川が氾濫したときに被害がこのあたりで収まり、歯止めがかかったことから「歯神社」として敬われるようになったとか。『はがみさん』にはなで石があった。祖母はなで石を撫でては幼い孫の口元をやさしくさすってくれた。

（歯神社の祠は、今も、若者たちで賑わう梅田ユニクロの横にひっそりと鎮座する。）

鬼子母神から歯神社へ歩いたあとは、お決まりで阪急百貨店の大食堂へ。もちろんこれが何よりの楽しみであった。洋食やら中華やら、うどんやそばやらの〝ご馳走〟の匂いが混じり合っただだっ広い大食堂はいつでも大勢の人でごった返していた。食券を買って、いくつも並んだテーブルの間を右往左往してやっとの思いで席を見つける。どの椅子の後ろにも、順番待ちの行列ができた。

阪急百貨店大食堂の人気メニューはライスカレーだった。イラストレーターの川田満成さん（昭和16年生まれ）は、お母さんに連れられて大食堂へ出かけてカレーを食べることは〝よそ行き〟気分で、〝非日常〟であったとおっしゃる。昭和30年頃までは両肩にカレーの皿を十枚から乗せて、順番待ちの行列で混雑するフロアを手際よくスイスイと運んでまわるウエイトレスのねえちゃんがいたそうで、川田さんはそれを見るのも楽しみだった。

川田さんより年下の私は、お子様ランチを食べるのが楽しみだった。大食堂を出ると特売場で買い物をして、大阪駅の地下の専門大店に連れて行かれた。薄暗くて、迷子になりそうなくらい混雑していた専門大店には大きな種苗店があった。苗木の土の湿った匂いは、鬼子母神のお香の匂いや大食堂のおいしそうな匂いとともに、半世紀以上経った今でも忘れられない。まちの記憶は、はっきりと、嗅覚にも残る。

大阪駅の人間模様

大阪駅の駅舎は、30〜40年おきに改築されてきた。現在の、大屋根の Osaka Station City は5代目になるが、時代を超えて、駅には人それぞれに思い出があり、ドラマがある。

旧天満青物市場の青物商・大島青果の創業者である故・大島信孝さん（明治35年生まれ）は、21才の時に大阪で修行をするため大正13年に、家出同然のように故郷の岡山から大阪に出てこられた。大正13年の大阪駅は煉瓦造りの二代目の駅舎であった。

1月25日の早朝6時に大島さんが大阪に着いた時は、駅前は一面の雪景色で、広場には五十台ほどの人力車が客待ちをしていたそうだ。見知らぬ土地で右も左もわからず、行く当てもなく、人力車の車夫にまかせて天満の口入屋（職業紹介所）に案内された。それが大島さんの人生のはじまりだった。

昭和20年の大空襲で大阪は焼土と化したが、昭和15年に改築された三代目の大阪駅は戦火を逃れた。天満の老舗提灯舗・㈱かわいの故・河合清為さん（大正11年生まれ）は、戦地から復員して、昭和21年6月に大阪に帰って来られた。早朝6時に広島を出て、満員の復員列車で大阪駅に着いたのは夜中の0時で、駅前の景色は変わり果てていた。一刻も早く天満の実家に帰ろうと歩きはじめた時、見知らぬ人に、こんな夜中に駅から出たら追いはぎに身ぐるみはがれると引き止められた。河合さんは仕方なく駅前の引き揚げ援護館で仮眠をされた。翌朝、援護館を出たらすぐに小さな子どもが寄ってきて『兵隊さん、荷物買おか？』と百円札を見せられた。「びっくりしたけど、そんな時代でした……」と、河合さんはしみじみ話しておられた。

昭和15年に竣工した三代目の大阪駅は、戦時下でもあり鉄骨の統制で当初の設計は大幅に縮小され、中央部を除いて四階以上は建てられなかった。そういうデザインなんだ、と思っていたが、あれは〝未完成の姿〟であったのだ。

駅前が再開発されるまでは、阪神百貨店の裏から今のダイアモンドシティのあたり一帯には、戦後間もない頃のバラック建てがそのままの姿で残されていた。ヒルトン・プラザのあたりにはパチンコ店や飲食店などが窮屈に建ち並び、木造2階建ての旭屋書店の本店もあった。雑誌や単行本が平積みされて混雑する店内を抜けると、参考書や専門書の別館があった。二階は板張りで、歩くとギシ、ギシ、音がした。

書店のあの床のきしみが耳の奥から甦ってくると、思春期を過ごしたまちの記憶が、つい昨日のことにように思い出される。

【井上 彰】
昭和 24 年生まれ。キタを舞台にした伝説のフリーペーパー「あるっく」の編集・発行人。取材、執筆、編集、広告営業のみならず、果ては自転車に乗ってポスティングまでこなしたスーパーエディター。「あるっく」はやがて「天満人」に発展し、発売１ヶ月で初版3,000 部を完売するも、平成７年に惜しまれつつ休刊。現在はペンをフライパンに持ちかえ、パスタが評判のイタリアン「祭屋 梅の助」で腕を奮いながら、さらなる情報発信を目論み中。

【祭屋 梅の助】
大阪市北区天神橋 1-14-8
tel.090-3058-8947
昼 / 11:30〜14:00　夜 / 予約営業（要 電話予約）　月曜休み

キタのえええもん
キタの手みやげ

薫々堂のせんべい「浪花津」

天満の手みやげなにがいい？って聞かれて、即答できますか？
天満といえば天神さんやねぇ
天神さんに縁があるものは梅、
昔、天満の天神さん戎門前に「薫々堂」という和菓子屋があった。
店名の由来は、天神さんから梅の香りが漂う様を表している。
戦災で焼けてなくなったけど、
戦後、天神橋筋商店街に再建して今も商売してはります。
この店の明治生まれのせんべい「浪花津」は、ゆず・味噌・生姜の三つの味がひとセットになってます。
二代目の店主さんが百二十年以上前につくったせんべいを、現店主の六代目さんが昔ながらの手づくり製法を守ってはります。
天神祭やうそ替え神事の鷽鳥（ウソドリ）を描いた箱もええ感じ、
ほかにもあるある天満の手みやげ、
梅鉢の焼きまんじゅう、
繁盛亭せんべい、
梅鉢せんべい、
天満の人でも知らん人多いと思います。
店主の林さんのお話もええですよ。

和菓子屋本来の昔ながらの食感・味を残しつつ、現代に受け入れられるものをつくる難しさを感じ、奮闘努力の日々・・・
見事な木箱や道具をつくる職人さんに負けない菓子をつくらなあかんと思ってやってきたけど、みんなやめていってほんまに寂しいですわ・・・
お店に行くと、はんなりしたやさしい大阪弁で話してくれはります。
こんど手みやげ持っていくときは、ここにしよっと・・・

（ミリちゃん）

6代目さんの考案した季節の大福、中でも桃大福は絶品。他にも落語をモチーフにしたお菓子を考案する落語好きのアイデアマン！

薫々堂（くんくんどう）
【所在地】大阪市北区天神橋 3-2-27
【TEL】06-6351-0375
【営業時間】平日 / 9:30〜19:00
日曜 / 9:30〜18:00
【定休日】火曜

阪
駅探 えきたん
北新地 kitashinchi

キタノザウルス「待ってくれる人を待っています」

普段、私たちがなにげなく使っている駅。じつは、知らないところにさまざまなアイデアが隠されています。便利に、快適に使えるのはもちろん、さらに人を楽しませてくれるようなアイテムもたくさんあるんですよ。
JR東西線北新地駅にもそれはありました。かわいい恐竜の銅像「キタノザウルス」。JR東西線の新規開通に合わせて、待ち合わせスポットとして活用するべく、大阪広告協会によって設置されました。西改札口の隣、みどりの窓口のそのすぐ横にある小さな広場に置かれています。この銅像は、地元大阪のイラストレーター佐藤邦雄さんの製作で、とびっきりの美女だそうですよ。銅像ゆえにクレーンで吊らなきゃならないほどの体重ですが、恐竜ならあたりまえ。むしろ、抜群のプロポーションです。どこから見ても愛くるしい表情で、太古の時代から数千万年にもわたって彼を待っているそうです。ロマンチックですね。なぜ米俵を背負っているのとか、なぜ新しく開通した駅で待っているのとか、その麦わら帽子は誰が編んだのとか、疑問は尽きませんが。
JR東西線は、97年3月に開通し、新しい大動脈となりました。北新地駅は乗降客数も多く、キタノザウルス前は、新しい待ち合わせスポットとして、多くの人に利用されるものと期待されました。しかし、残念ながらほとんど待ち合わせに使われなかったのです。「期待」と「米俵」を背負っていただけに、もったいない。その原因を推測すると、乗客の多くは地下鉄に乗り換えるため、キタノザウルス前を通りません。東西の出口からさっさと出て乗り換えてしまうのです。だから、彼女の存在自体を知らない人もたくさんいるんじゃないかな？
このような状況では、キタノザウルスがかわいそうです。せっかくの愛らしい表情なのに、このまま活用されないのは宝の持ち腐れのような気がします。多くの人に知ってもらうために、あの場所で待ち合わせするための「ひと工夫」が欲しいところですよね。ここで待ち合わせすると、素敵なことが起こる。こんな楽しみがあってもいいかもしれませんね。そういえば、彼女の足の裏には「素敵な秘密」があるとかないとか……。
さて、それでは最後に、キタノザウルスちゃんからひとこといただきましょう。

「待ってくれる人を待っています」

（なみはやノーツ）

キタの絶景ポイント——

グランフロント北館9階「北館テラスガーデン」から見る新梅田シティと夕陽

摩天楼が立ち並ぶ梅田周辺、水の都・中之島、天神祭の中心地・天満天神、下町情緒溢れる中崎町と中津、淀川水系がひろがる大淀から長柄、本庄…。キタにはさまざまな顔を持つエリアがあり、そのぶん、眺めのいいビューポイントもたくさんあります。なにかとせわしない時代ではありますが、そんななか、ホッとひと息つける心のオアシスを求めて、このコラムでは気持ちのいい場所をひとつずつ紹介してきます。
記念すべき第1回目は、もっとも新しくできたビューポイント。グランフロント大阪の中にあります。グランフロント大阪の北館9階にある「北館テラスガーデン」。
「北館テラスガーデン」は、低層階の最上階にある屋上ガーデンです。グランフロント北館は大きくて気持ちのいい吹き抜けを持つ建物ですが、最上階から屋外に出られる「北館テラスガーデン」は、格別です。インターコンチネンタルホテル大阪と北館オフィスタワーに挟まれ、南北の視界は遮られているのだけれども、東西に広大な景色がひろがっていて、とても気持ちがいいです。
床面は緑化され、芝生が敷かれています。ベンチもあります。JR大阪駅や阪急百貨店など最近建設された高層施設には必ずといっていいほど屋上緑化がありますね。ここもそう。同階にはコンビニやカフェもあるので、飲み物を買ってここでホッコリなんてことも。思わずそのままお昼寝しちゃいそうですが…。

さて、「北館テラスガーデン」には、ここでしか見ることのできない絶景があります。
西側を臨むと、真っ正面に、空中庭園のある新梅田シティのビルが風景に大きなアクセントを加えるようにしてそびえ立っています。
しかも、おなじみのタテのコの字型のシルエットではなく、真横から見る新梅田シティです。2本あるはずのビルが前後に重なり合って、1本のオールガラス張りのビルに見えます。この場所に来て初めて見ることのできるシルエットですよ。
しかも、です。夕暮れ時にここを訪れると、そんな新梅田シティのビルの背後に、夕陽がとっぷりと沈みます。誰がこんな素敵な演出を考えたのですか？
心がささくれ立ったとき、身体が鉛のように重たいとき、漆黒の新梅田シティの背後を赤に染める夕陽を眺めながら、リフレッシュしてみませんか？（ルイス）

純喫茶「マヅラ」

～旧きをたずねる　純喫茶 巡礼～

のっけから目を奪われるのは、四ツ葉のクローバーの看板やジョニーウォーカーの人形。そして「いらっしゃいませ！」と威勢のいい声でお客様をお迎えする人物。この方こそが「マヅラ」社長の劉 盛森（りゅう せいしん）さんです。なんと大正9年生まれの御年94歳！
店内に一歩足を踏み入れ、天井に目を向けると、…宇宙？ ガガーリンが地球を見た時の群青色が敷き詰められているのだそうです。そう！私たちが子どものころに憧れた、あの宇宙がひろがっているんです。これはまさに大阪万博のパビリオンのような古きよき「昭和の世界」。東京から来店するファンが多いのも納得の世界です。それにしても、なぜ宇宙？ 他にも、ファンの間で語られる謎が、ここにはたくさんあります。その謎を解き明かすべく、劉さんに突撃インタビューです！
そもそもこのヘンテコリンな店名は？「旅したインドネシアのマドゥラ島で夕陽を眺めながらギターを弾いてたら、しおらしい女性が、いい曲！と声をかけてきましてん。大阪のことも知ってくれてたし、青春の思い出として島の名前を屋号にね」と。なるほど〜、甘いロマンスがあったんですね。
ファンの間で語られる謎、看板マークは四ツ葉のクローバーなのか？その問いには、「四ツ葉のクローバーやで。あっさりしたものがいいと思って。阪神（百貨店の包装紙）もそうやろ。簡単で平凡やけど、みんながいいと言うねん」。なるほど〜、すっきり。
お話しながら珈琲をいただいていると、「昭和33年の終わりから味は変えてないで」と、ポケットから手書きのブレンドレシピが出てきます。「珈琲は嗜好品やから、同じ味を出さないとお客さんは来なくなる」。このあたりの努力は、きっと素人の想像の域を越えてるはずです。
さて最後にして最大の謎。店内を宇宙にしている理由をお聞きすると、「人は、気を大きくする時は空を見る。下は見ない。お客さんが一服できる手法を考えて」とのこと。「忙しい人にゆっくりする場所を提供できれば、それだけでも社会に役立つ」と。そうか、これはおもてなしの心映えだったのですね。
ファンはスペイシーな空間を求めて来るのではなく、こうした店主の気持ちを察して来る。魅力をつくるのは人だと、あらためて実感しました。忙しいあなた。気持ちを癒しに、ぜひ、純喫茶「マヅラ」へ！

（Ｌｅｆｔｙ）

大阪市北区梅田 1-3-1
大阪駅前第一ビル B1F
tel. 06-6345-3400
営業時間：
平日 / 9:00〜23:00
土曜 / 9:00〜18:00
定休日：日・祝

羽生結弦選手が男子初の金メダルを獲得して大いに盛り上がったソチ五輪のフィギュア。今回入賞した高橋大輔選手や町田樹選手、村上佳菜子選手らトップスケーターのスケート靴をミリ以下で調整する職人技の持ち主が、芝田商店街の「小杉スケート」にいます！

扇町総合高校吹奏楽部の「オーギーズ」って知ってますか？吹奏楽だけじゃなくてマーチングも得意で、めっちゃ盛り上がるライブやります。一所懸命なコラばかりで、ファンも多いんですよ。あちこちで無料ライブしてるしボランティアにも熱心。HPでチェックして！

彼女とキタのラブストーリー
――第一回――

聞き手・書き手　依藤智子

見事やなと思いましたよ。造幣局のあたりまで行くと花火が見えて。（天神祭は）こんなんやったんかしら、と思いました。

阪野商店　阪野俊子さん

大正十年生まれ。

船に必要な道具を納める船具商のお家に生まれ、大阪は新町（西区）で学生時代をすごされました。

十七歳でご結婚。天満は菅原町の乾物類の包材を取り扱う阪野家での生活がはじまります。

「天満」という言葉も知らなかったという少女が、天満のお家に嫁入りし、どんなふうにこのまちで歩んでこられたのか。

阪野俊子さんにお話をうかがいました。

水泳に、バスケットボールにと、快活な女学校時代

市岡高等女学校に通われていた学生時代の楽しみは、バスケットボールと水泳。バスケットボール部の所属ながら、幼いころから、お父さんに海に連れていってもらっていたことから、水泳はお手のもの。学校にプールがあることが珍しかったこの時代、「その時分、誰も泳ぎに行ってなかったけど、一人で泳ぎに行ってました。わりに、自由でしたね」と、当時のことを楽しそうに語られます。校内で一番の記録をつくったこともあるそうで、今のお上品なお姿からは想像がつかないくらいスポーツ大好きで、快活な女学生だったそうです。

当時を思い、「あの時分が一番いいわ」と、自由な学生時代を懐かしみ笑顔があふれます。

卒業後、間もなくしてお見合い、そして結婚。天満にお嫁に行くことになりました。女学校の友人の中でも一番早かったという婚期については、「まだ早いわ」と、思わず当時の本音がこぼれます。

まじめそうな人

旦那さんとは、お見合い結婚。知人を介して紹介され、「まじめそうやな」と、初めて会った時の印象を語られます。

出会いからご結婚までは、「大急ぎ」。旦那さんのお父さんのお体が悪かったことから、お医者さんにも早くしなさいと言われ、結婚を急いだと言います。

そのため、結婚前に二人でデートに行くような時間はあまりなかったとか。でも、娘さんが大きくなられてからは、夏休みに娘さんたちを四国の祖父母に預け、お二人で全国各地へご旅行に行かれることも多く、仲よしご夫婦だったそうです。

天満の男性は、お祭りで奥さんに大変な思いをさせるぶん、奥さんへのねぎらいも忘れない。優しい人が多いと聞きます。俊子さんの旦那さんもきっと、そんな優しい方だったのでしょう。

嫁がれてからの楽しみは、コーラス。五年前の八十八歳まで、一万人の第九に二十五年間連続（旦那さんが亡くなった年を除く）で参加されていたそうです。旦那さんも「コーラス、行きや」と、俊子さんの楽しみに協力的だったと言います。

抽選にはずれたり、申し込みを忘れたりで、五年のブランクがありますが、「今年は忘れんように、申し込まなあかん」と、やる気じゅうぶん。俊子さん、九十三歳の第九をぜひ聞いてみたいです。

「天満」という言葉を知らなかったくらいやわ

「天満という言葉を知らなかったくらいやわ」「天神祭もあんまり知らず、お渡りが通ると言うのでちょっと見たくらいやね」と、ほとんど馴染みのなかった天満へ嫁がれた、俊子さん。

嫁ぎ先の天満は菅原町の印象は、「静かなええとこでした。この界隈は現品をそこで売り買いするようなまちではないし、問屋さんが多かったので」と、海苔や乾物問屋が軒をつらねるまちの印象を語られます。

阪野家は、海苔や乾物を包む文庫紙や、束ねるための紙製の紐を納める紙屋さんです。その当時の阪野家には、番頭さんや住み込みの丁稚さんだけでなく、女中さんがおられました。そこへ、俊子さんの嫁入りで一緒に来られた女中さんまで加わっての大所帯。

旦那さんが一人息子でかわいがられていただけに、結婚当初は、阪野家の女中さんから冷たくされるようなこともあったそうです。困ったことはありましたか？とたずねると、「ありません」と、慎ましやかにお答えになられます。

若くしてお嫁に行って、きっと辛いこともたくさんあったと想像されますが、そこは、ぐっと腹の中にしまいこむ。芯の強い、大正生まれの女性の美しさがあります。

相談したいこと、ありますわね。ちょい、ちょい。

旦那さんは面倒見のいい方で、仕事にも地域の活動も熱心に取り組まれた方でした。

菅原町という名前が残ったのも阪野さんのおかげだと語り草になるような、地域の功労者だったそうです。

「父は、ずっと外に出ている人でした。いっぱい役（地域の役や天満宮の氏子総代）してましたからね。会合も多かった。商売もしていたし、文章を書いたりもしてました。食べるのも、飲むのも好きな人でした。よくあんなに時間があったな、と思うくらい。器用な人だったんでしょうね。その間、家のことは母がしてくれていました」と、娘さん。

旦那さんがいない間、家事やお子さんのお世話は俊子さんが一手に引き受けておられました。

仕事に地域の活動に忙しい旦那さんに、一緒にいてほしい時はなかったですか？とたずねると、「ありましたね。ちょい、ちょい。金銭的なことは心配なかったけど、やっぱりちょっと相談したいこと、ありますわね」と、家庭を支える妻としての本音の部分も見え隠れします。

若かったせいか、しんどいと思ったことなかった

天満といえば、天神祭。この界隈が年中で一番忙しくなる時期です。阪野家も例外ではなく、お家に来られるお客さんや、渡御列の接待は、すべて俊子さんが仕切られていました。

「天神祭の時期は、主人は外に出てますもん。うちらのことよりね」という言葉から、外で活躍する旦那さんを陰ながら支えてこられた、家を守る妻としての凛とした強さが感じられます。

当時、阪野家からは、通り側と川側の両方の渡御列を見ることができました。そのため、知り合いの方がお客さんを連れてこられ、多くの方がお祭り見物に来られていました。中には宝塚の女優さんもいらっしゃったとか。たくさんのお客さんで、とても賑やかだったそうです。

天神祭の際には、家中をすべて片づけ、二階は両側が見物できるように空けて、間口いっぱいの幕を張り、提灯を飾る。大きな屏風を飾るといったお祭りのしつらえもし、お客さんをお迎えされていました。

お家に見物に来られる方の接待だけでなく、旦那さんが氏子総代のお一人をされていた時には、渡御列のみなさんへの接待として、レモン水をつくって提供しておられました。人手が足りないので、親戚やお店の方にも手伝ってもらい、一家総動員で対応されていたと言います。

お祭りのお料理は、近所の馴染みの料理屋さんに頼んでつくってもらったり、家でできるものはつくっておられたそう。

天神祭では、鱧（はもちり、照り焼き）、タコ、宵宮（よみや）には白天のお吸い物（きくらげ入りの白天、カイワレ、うり）を食べるのが習わしです。

このような祭りのしつらえや接待は、俊子さんがお嫁に来られるまでは女中さんが仕切られていました。でも俊子さんは嫁入り一年でそれらを覚えられ、女中さんには一年余りで辞めてもらったと言います。

天満の右も左もわからない中で、お家のことや天神祭のこと、たくさん覚えないといけない状況で、しんどかったことも多かったことと思いますが、「若かったせいか、しんどいと思ったことなかったですね」と、俊子さん。頭が下がります。

すんだら、もう、やれやれ

「お祭りは、接待の印象が強いですね。学生の頃は、見物に来たはずの友だちにもお手伝いをしてもらっていました。それでも私たちは、忙しいけど楽しかった思い出があります。その点、母はいろいろと大変だったと思います」と娘さん。

お家の接待に渡御列の接待にと、大忙しの天神祭。そんな忙しい頃を思い、「すんだら、もう、やれやれ」と、俊子さん。阪野家を代表して接待を仕切っておられた頃の気の張りと、お祭りを終えた安堵と疲労、そして、達成感を感じるお言葉です。

こんなんやったんかしら、と思いました

天神祭を裏で支える女性は、接待やその準備で忙しく、天神祭を楽しむ時間がないと言われます。花火を見たことがない、子どもや旦那さんが活躍しているところを見たことがない、という方が多いそうです。

俊子さんも例外ではなく、旦那さんのお祭り姿は宵宮（よみや）にお参りに行った時に見るくらいで、お祭りの中で活躍されている姿は見たことがなかったそうです。

天神祭の醍醐味といえば船渡御（船からの観覧）ですが、はじめて乗られたのは六十代になってから。お嫁に来られて四十年以上が経ってからだったと言います。「それまでは、ゆっくりとお祭りを見たこと、なかったですね」と、俊子さん。天神祭は、そんな女性たちによって支えられてきたのかもしれません。

「見事やなと思いましたよ、造幣局のあたりまで行くと花火が見えて。（天神祭は）こんなんやったんかしら、と思いました」と、その時の様子を語る声が弾みます。お祭りを縁の下で支えてきたからこそ、その感動もひとしおだったことでしょう。

最後に、天満で七十年以上過ごされてきた俊子さんに、あたらめて菅原町について語っていただきました。

「天満はええまち。菅原町はよろしいね。ええところ。静かやし。ご近所のお付き合いも和やかで。みんな、いい人やね」

お嫁入りしたその日から、新しい家族との生活がはじまります。それは同時に、お家の習わしや、そのまちとのお付き合いのはじまりです。

都会にありながら、昔ながらの人と人とのつながりが色濃いといわれる天満では、天神祭がまちの人々をつなぎ、まちを愛する人を育んでいるように感じます。（了）